

ずいそう

国内の国際化—中国・同済大学との交流を通して—

望月秋利



私の研究室には、現在中国とカンボジアから各2人の留学生が所属する。学生18人中の4人であるから2割強を占め、国際色豊かなようにも見える。しかし、日本人学生も含めてそんな感じはまったくしない。国際化とは、端的に表現するなら「外国人をそうと意識しないようになる」ことを言うのではないかと、とも思う。中国・同済大学との交流の思い出をたどりながら、一文をまとめた。

上海市の北西に位置する同済大学との交流のきっかけは、'90年に私のところに（当時は大阪市立大）、曹先生が日本の大学との交流校を探しに訪問されたのが始まりである。当時、同大学からは蔡敏君が留学しており、そのような大学を中心に回られていたのだと思う。今でこそ我が国にもその実力が広く知られている同済大ではあるが、当時の日本では無名に近く、訪問の成果ははかばかしくなかったと伺っている。好奇心旺盛の私は、'91年に協定を結ぶために上海を訪問した。当時都市高速道路はなく、虹橋空港から二十数kmの距離を、車で2時間程かけて大学に向かった。車を取り巻くように走っている自転車列に警笛を鳴らしつづけて走行するという、初めての体験が待っていた。やっと到着した大学は、学生数4.1万人、建物が100ha以上の敷地内に所狭しと林立し、当時街中で多く見受けた低層の古い住宅に比べれば、古いが際だって大きく、立派であった。上海の中心・南京路に出かけても湧き出てくるような多くの自転車の列だけが目に付き、夕方になると1本通りを入れれば、電灯がポツン、ポツンとしかない暗い町並みであった。滞在中、車での蘇州への数時間の旅中、至るところで道路工事を目にしたが、建設重機はパワシャベルを1台を見ただけであった。帰りには北京—上海間高速道の一部となる、できたばかりの区間を走行したが、盛土の沈下がひどく、あちこちで問題を起こしていた。2回目は、'92年に蕪湖という、上海から列車で8時間程の、長江のほとりに建つ発電所裏山の安定問題の技術指導に出かけた。食べ物の種類は大変豊富で、イメージに有るような中国を感じ、楽しめた。また帰りの長江船上で見た日の出は今でも思い出す。上海に帰り、平和飯店で聞いた“上海 Jazz”は古き良き時代のムードを今に残していた。この交流は業界からの応援も受け、'98年までの行き来はそれぞれ25人を超える。

徳島大学へ転任してからも交流協定を結び、3年目を迎える。その間に3週間と短期ではあるが、5人の

大学院生を同済大へ研修生として送り出した。もちろん日本人学生の“国際性の改善”を目指したものである。さてもう一つは、遠心力模型実験技術に関する交流である。この技術は恩師三笠正人先生が世界に先駆けて開発したもので、現在世界で200台を超えて普及している。中日共同シンポジウムや技術的検討会を開催し、同済大には大型装置が近く導入される予定である。他にブラジル・サンパウロ大へ客員教授として訪問したり、多くの交流訪問者を受入れ、またJICAベースの共同研究もある。目的もさまざま、多様な形式の交流が大学では盛んに行われ、ここには書かなかったが留学生の果たす役割も大きく、交流を通して大学は確かに活性化している。

もっとも国際交流という言葉に今更新鮮味があるわけではないが、その概念が広く認識されたのはそう古い話ではないと思っている。明治以来の、我が国の「欧米の先進技術を一方的に学ぶ」という時代から、「相手国と対等に学び合う」という概念に移行した高度成長期以降のことではないであろうか。外国人留学生の受入がそのまま国際交流というわけではないが、一つの指標としてその統計を見ると、'75年には6千人弱、'90年には3万人を超える。ちょうどその頃「21世紀への留学生政策」で、「フランス並の10万人」の受入れ目標が掲げられ、ほぼ順調に推移して昨年度は7.8万人を超えた。その90%は東南アジアからの学生である。また日本人の海外留学生は7.5万人強であるので、“国際交流”が名実共に進んでいることを実感する。しかし、米国は日本の7倍、英国は3倍の留学生を受入れているというから、一大産業となっているのではなかろうか。

さて、現在の上海は高層ビルが林立し、二重の環状高速道路網、リニア線、地下鉄網の整備と、ここ10年間の発展は目覚しく、相手国の状況もどんどん変わる。「国際交流の目的」に対する解答を持ち合わせているわけではないが、初期は「両国の人、文化、技術の理解」、そして現在は「それらの融合」の段階に入っているのではなかろうか。留学生（又は外国人）の多様性、バイタリティを考えると、我が国の現在の沈滞ムードを打破してくれる一つの原動力になり得るのではないかとも思える。このような時期だからこそ、「国内の国際化」についても一度考えて見られてはいかがであろうか。

—もちづき あきとし 徳島大学工学部建設工学科教授—